

異世界で身代わり巫女みこをやらされています

登場人物紹介

ピケ

バルテニオ共和国の
軍人で
ラフィタの部下。

ラフィタ

タバ王国と敵対する
バルテニオ共和国の
軍人。

パウラ

ガリアストラの義妹。
海の女神の巫女だと
言われている。

ハビエル

ヒビアーナ号の船員。
生意気な少年だが、
素直で他の船員たちに
可愛がられている。

アメツ

ヒビアーナ号の船員で
海神教の敬虔な信者。
海の女神を崇拝していて、
時に過激な行動に……!?

新見瑞希

スカー被害にあったOL。
生来のお人好して、
困っている人を見ると
助けずにはられない。

ガリアストラ

自他とも認める絶世の美男子。
タバ王国の実業家兼、
ヒビアーナ号の船長で
海の荒くれ者を率いている。

営業事務、新見瑞希——そう印字された社員証を首から提げたまま帰宅したせいで、ストーカーに名前と勤務先が露見した。今更遅いけれど震える手で社員証を服の中に隠し、私は走りすぎて癡變する太腿の筋肉をさする。

「神様仏様、誰でもいいので、どうか助けてください……っ、お願いします——ゲホッ」

逃げ込んだ夜の林の中、ぼつねんとした小さな祠に身体を押し入れ、荒い息で祈る。

それにしても埃っぽい。音を立てたくないのに咳き込んでしまった。

少しでも音を潜めようと口を押さえると身体が激しく揺れて、何かにぶつかる。

コオンと高い音がした。

壊してしまっただかと慌てて拾い上げたそれは、十五センチぐらいのいびつな形をした木の塊だ。

目をこらすと、顔の形がわかった。一瞬、仏像かと思っただけれど胸に凹凸がある。

「女神様——？」

咄くのと同時に、林全体を揺すぶるような突風が吹く。私は、目を強く瞑って身構えた。

目を開ける前から、何かが恐ろしく変化したことがわかる。

なぜなら、近くに海はないはずなのに、急に濃密な潮の香りをついたからだ——

ゆ ゆ ゆ

その香りを嗅いだ時、目眩のような、眠気のような、くらりとする感覚がした。直後、すぐ近く——ほとんど耳元で見知らぬ男の声がする。

「ようこそ、俺の船の俺の部屋の俺の戸棚の中へ——こんなところで寝てるなよ」

目を開けると、あまりに明るくて、視界が白く染まっていた。

悲鳴をあげようとするのと同時に、その白い世界からぬっと出てきた手に口を塞がれる。

「少し静かにしてくれるか？」

自分が小さな祠に身体をねじ込んでいたことは覚えてる。でも、これほど狭かった？

十分に身動きが取れない。男の腕を振り払おうともがいても、彼の手はびくともしなかつた。

何かにぶつかり、それがガラガラと崩れる音がする。

またものを壊してしまっただかもしれないと思い、身体がこわばった。

その反応で私が落ち着いたと思ったのか、男が口から手を離す。

「やめて！ お願い！ やめて!!」

「寝ぼけるな。落ち着いて俺の顔を見てしろ」

男はうんざりした口調だ。言葉の意味がわからず、私は未だに眩んだままの目を瞬く。

「俺は男で君は女。だから君が女として危機感を覚えるのも無理はない。と、本来は言えるが、どう見ても君より俺のほうが美人だろうが。襲われると考えるなんて調子に乗りすぎじゃねえか？」顎を掴まれ、無理やり男の顔を見せられた。

ぼんやりとした視界が焦点を結び、男の輪郭がくつきりしてくる。そして、私は息を呑んだ。

「絶世の美男子だろう？」

目の前にいたのは、長く艶やかな黒髪が似合う美人。けれど女性的なところはなく、男くさい笑みを浮かべている、まごうことなき美丈夫だ。粗野な感じは少しもない。

優雅な柳眉に高い鼻梁、薄い唇には、上品な印象が拭いがたく存在していた。

ファーで縁取られたロングコートの上からは革の肩帯を斜めにかけて、すらりと長い鏢のない剣を提げている。

カトラス——そんな耳慣れない名称が、頭に浮かんだ。銃刀法違反という言葉も。

野生の肉食獣と遭遇してしまった時みたいに、ゆつくりと男の顔を見やると、こちらを覗き込む

輝く青い瞳と目があった。

それはまるで波打ち際に立つ者を水底に誘う深い海のように、見ていると不安になる。

確かに彼は、傲慢な口上も許されるだろうほどに、途方もなく美しい男だった。

今、その口元には歪んだ笑みが浮かび、目には軽蔑も露わだ。

「俺のことが好きだからって密航するのはよくねえよなあ？」

「密航？ え、好き!? な、なんのことだか……あなたが誰だかもわからないし」



「とぼけるな。面倒くせえ」

彼は気怠げに黒い前髪をかきあげる。息を呑むほどの色気に、思わず目を逸らした。

「忘れたつてのなら教えてやる。俺の名前はガリアストラ。神官と貴族を両親に持つ女王陛下の覚えもめでたい海の実業家だ。そこらの海賊程度、簡単にいなせる腕もある。顔だけじゃねえ本物の海の男だ。ほら、思い出したらどう？」

思い出すも何も、そもそも知らない。でも彼はきつと有名人なのだろう。

「ほら、告白してみるよ。俺が好きなんだろ？ 俺をどう思っているのか聞かせてくれよ、なあ」

彼は嘲笑を浮かべて促す。

悪意に満ちたからかいだ。相手の心をずるりと引き出して、ズタズタに引き裂いてやろうと舌なめずりする獣の残忍さが滲んでいる。

もしも私が本当に彼を好きだったなら、確実に深く傷ついていたと思う。

「あいにくですけど、私はあなたに少しの好意も持っていませんし、今そうであってよかったと思っているところです。それより、ここはどこですか？」

「俺の船——ビビアーナ号の、俺の部屋。さっきも言ったと思うが」

彼は笑みを消して淡々と答えた。

「待って、どこですか？」

「俺の私室兼船長室だ。まったく涙ぐましい努力だ。俺に近づくためにあいつらを出し抜き、船長室にまで忍び込んで……いつから俺をつけ回していたんだか。まったく、気分悪いな」

そこまで聞いて、彼が酷く不機嫌な理由を、私はようやく理解し始めた。

「あなたの、部屋？　そもそも、船？　船長室？」

「酒に酔ってここに入り込んだ理由を覚えてないつてのは、聞かねえぞ。見張りを置いているからな。弾みで入れるほど、ビビアーナ号の警備は緩くねえんだよ」

彼は断固とした口調で言う。

私は薄暗い部屋に光を取り入れている窓を見た。力の入らない身体に何とか活を入れて起き上がり、ふらふらと窓辺に寄っていく。

歪んで曇った窓ガラスの向こう側には、どこまでも続く紺碧の海原が広がっていた。

「海……そんな」

身体がぐらりと揺れる。目眩もあるが、地面が、今私のいる場所が、揺れているからだ。

ここは木造の船の一室——そして海のただ中だった。

そのことを認識し、恐る恐る男を振り返る。

「あなたが私を、連れてきたんじや——」

「君を？　何のために？　うぬぼれないでくれ。君に欠片の興味もない」

仏頂面でぴしゃりと言われて、私の顔に血が上る。

「別にその、私自身に興味はなくても、会社とか、お金とかいう理由もあるでしょうし」

「なるほど？　確かに君は金持ちっぽいな。だが俺は金にも困っていない。事業も順調だし、欲しいと口にすれば俺に大金を貢ぐ女はいくらでもいる」

ただ事実を指摘する時のような口調で彼は言う。確かにそうだろう、と思わせる説得力が彼にはあった。

「でも私、こんな船に乗った覚えはありません。あなた以外の人の仕業では？」

「俺の仲間はそんな意味のわからねえことしねえよ。どうやってここまで侵入した？　最近、船の出入りには特に注意していたはずなんだぞ。それを、三日間も潜伏していたとは。どんな手妻を使ったんだ？」

「三日間？」

「一番最近、停泊した港から出航して三日だ。流石に一ヶ月前に停泊した島から乗船していたとは言わねえよな？　ずっと俺の部屋の戸棚に隠れて、こそこそ俺たちを監視してたとか……」

「そんなことしてません！」

「そうであつてもらいたいぜ。気色悪いからな」

彼は怒っていた。私が彼を好きなあまり、部屋に忍び込んだと考えているから。

「なあ、君。証明できるか？　君が君自身の意思でここにいたわけじゃねえと」

「……どうやって？」

「知るかよ！　証明できねえなら俺は俺の部屋に突如として現れた君に不快感を示したままでも構わねえよなあ？　君が俺のストーカーじゃねえ保証はどこにもねえんだし」

「私がい？　ストーカーだなんて酷い！」

「酷いのは君だろう」

二の句が継げなかった。

彼の言う通り、ここが彼の部屋だというのなら、そこに許可も得ず侵入していた私が悪い。でも、忍び込んだ覚えはないのだ。——ただ、私を追いかけ回していた男の顔は知っている。

そしてそれは、ガリアストラと名乗るこの男ではなかった。私を誘拐する理由がこの人にはない。「一体君はいつから船に乗っていたんだ？——事と次第によっちゃ大変なことになる」

「大変なことって？」

「君がそれを知っていたらアウトだな。だから、それでいい。必死になって知らないふりをしていろよ。ところで、君が自らの意思で俺の部屋に侵入したんじゃねえなら、そろそろ謝罪なんかをもらえる頃合いだと思ってもいいかよ？」

ガリアストラは心底嫌そうに、けれど冷静に謝罪を促した。

冷や水を浴びせられたような気持ちになる。彼にとって、確かに私は犯人側だ。

私を付け狙っていたあの男が連れてきたの？

もしも、ストーカー扱いされるつらさを私に味わわせようと思ったのなら、効果は抜群だ。

「……ごめん、なさい。そんなつもりは、なかったんですけど」

「君の主張では、君はここに連れてこられただけの被害者なんだからそうだよな」

全く信じていない口ぶりだった。それを責められるはずもない。

私だって、もし私の部屋に隠れていた男が、自分は知らない間にここに連れてこられたんだと主張しても、絶対に信じない。

「それじゃ、君は元いた港に強制送還だ。アルンかい？」

アルン——聞き覚えのない地名だった。

彼の名前を聞いた時から、嫌な予感はしていたのだけれど、一縷の望みをかけて尋ねる。

「あの、ここって日本の領海ですよね？」

「二ホンってどこだよ？　ここはダバダ王国とパルテニオ共和国の接続水域だが？」

「……ダバダ？　パルテニオ？」

「次は記憶喪失のふりかい？　そこまでして俺の同情を引きたいか!？」

「ほんとにわからなくて」

じわりと目に涙が浮かぶ。本当に、本当に本当に、わからないのだ。

私は額を押さえて、祠に隠れた後のことを思い出そうとしてみる。

けれどいつ気絶して、ここまでどうやって運ばれたのか、見当もつかなかった。

私の感覚では、祠の中で目を瞑り、目を開いたらこの船にいたというふうなのだ。

「泣いてくれるなよ。鬱陶しいからな」

彼が嫌そうに顔を歪めた時、一つしかない扉がノックされた。

「——来客だ。姿を見られないように部屋の奥に隠れている」

ガリアストラにしつと手で追い払われる。

チケットを購入した覚えもない船の上だ。見つからないで済むなら、そのほうがきつといい。

幸い彼に、私をどこかに突き出そうという気はないらしかった。彼の言葉に従い部屋の奥へ行く。

ハンモックに積まれた布団や毛布の陰に隠れられそうだ。

光の差し込まない暗がりに座り込むと、涙が溢れる。意味がわからない。

会社からの帰宅途中、ストーカーから逃げまどっていたのは終業後、つまり夜だ。窓の外の明るさからして数時間は経過している。

そして、元いた場所からかなり離れた場所にいるのは間違いない。だって、家の傍には川しかなかった。

つまり、誰かが私をここへ連れてきたのだ。——この過程で、その人物が私の身体に触れたのかもしれないと考えると、怖くて気持ち悪くなる。思い出したように震えが起こった。この気持ち悪さをガリアストラという男も感じているのだろう。立場的には奇妙だけれど、気の毒に思った。

「——だから、無理だと言ってんだろ」

ふいにガリアストラが、扉の向こう側にいる人へ不機嫌に言った。何か要求されているらしい。外にいる人が扉をガタガタと大きく揺さぶる。

「まずは一旦、扉を開けやがれ！ ガリアストラ！」

「君が冷静になつたらな！ 頭を冷やしてから出直してこい、アメツ！」

外にいる人とガリアストラが怒鳴り合う。

漁師とか、海の男性は気性が荒いイメージがあるから、彼らにとつては普通の会話なのかもしれないけれど、怖い。……そういえば、ガリアストラは漁師という感じじゃなかった。

先程、彼はなんて言っていたっけ？

「……女王陛下の覚えもめでたい、実業家？」

徹頭徹尾わけがわからないまま涙をすすする。

外と内とのやりとりは更にヒートアップしていった。

「ガリアストラア！ 出てこい！」

外の人はどうしても中に入りたいうようだ。扉を壊しそうな勢いで叩き始めた。

ガリアストラが弱ったように首をかきつつ、私の隠れているほうを振り返る。

「……君に俺の義妹のふりをしてもらうか」

「え？」

「実はな、俺は今、とある問題を抱えているんだよ」

状況の割にガリアストラはのんびりとした口調だ。扉を一枚隔てた向こうは、物々しい気配が漂っているのに。

「あの、問題って何ですか？」

「もしかしたら港からここに来るまでの三日間の潜伏中に、君も聞き及んでいるかもしれないが」

「聞こえているのか、ガリアストラ！ ミコを出せ！ 出せないのなら理由を説明しろ！」

外には複数の人がいて、「ミコ」を出すよう要求していた。

「あの、何もわからないので詳しく教えてください」

扉には内から横木が渡されているものの、外からの衝撃で今にも蝶番が外れそうになっている。

「聞いての通り、あいつらは俺の義理の妹のミコに会いたくて会いたくてたまらないんだ。今すぐ

この船から叩き落とされたくなかったら、俺の義理の妹のふりをしろ。——そういや君の名前は？」
「……瑞希です。新見瑞希。あなたの義妹さんのふりをすればいいんですか？」

「そうだ。やってくれるな、ミズキ？」

ほとんど命令に近いそれに、私は頷いた。さほどつらい内容じゃない。

「外の船員たちは、俺がゴールド島で義妹を船に乗せたと勘違いしていて、会わせろって煩いんだ」
ガリアストラの妹さんなら相当な美人に違いないから、会いたくなるのも無理はないかも……いやでも、義理なら似ていないんじゃない？」

「私が義妹さんのふりをして会えば、外の人たち落ち着くんですか？」

そう聞くと、ガリアストラは形のいい眉を顰めた。

「ああ。だが、取り返しがつかねえぞ？ いいのか？」

一体何の確認を取られているのかわからない。

ただ彼の義理の妹だという「ミコ」という女性のふりをするだけだ。

彼女が何歳なのかは知らないけれど、話をもちかけてきたのはガリアストラなのだ、義妹を名乗って無理がない程度には年齢差がないか、外の人たちは義妹の顔や年齢を知らないのだろう。

私の容姿が彼らの期待と違っている可能性は大いにあるものの……

「それじゃ、海の女神のミコのふり——頑張れよ？ ミズキ」

海の女神の、ミコ？ もしかしてミコって義妹さんの名前じゃない？」

神様に仕える巫女さんって意味だった!?

……だからって別に何か問題があるわけでもないよね？

「今開けるから待ってろ！ ドアを叩くな！ 巫女が怯えてるんだっつもの！」

連打の音がやむと、ガリアストラはすぐに扉を開けた。

そこに居並んでいた物騒で凶悪な男たちの顔ぶれを見て、心臓が縮み上がる。

「ガリアストラ、そちらの方が巫女様か……ご壮健そうでいらっしやる」

「そりゃあ海の上の女神の巫女だぜ？ 五体満足、元気に決まっつてんだろう」

「だが、頬に涙の痕跡があるように見えるが」

「アメツ、君たちが脅かすからだよ」

ガリアストラはしれつと言った。

「おれたちはただ巫女様にご迷惑をおかけしただけだった、つてことか」

先頭にいた特に顔の怖い人——アメツと呼ばれた男が得心した様子で肩を落とす。

彼の身長はおそらく二メートルを超えている。全身を筋肉に鍛われた儼つ男で、眉毛のない三白眼に血の気のない顔をしていた。

道ですれ違いそうになったら、かなり手前から迂回したくなるタイプの男だ。

「疑いは晴れたかい？」

「無論だ。悪かったな、ガリアストラ。巫女様へは後日改めて謝罪をさせていただきます」

「キャプテンがアルン港で適当な女を見繕って巫女のふりをさせてるだけじゃねーの？」

長身の男のすぐ後ろに隠れていた小麦色の髪と瞳をした青年が、ひよっこり出てきて言う。

港で見繕われたわけではないものの、状況として私の境遇を言い当てていた。

しかし、その場にいた人は彼の発言に感銘を受けた様子がない。

アメツという男が溜め息をついて首を横に振る。

「ハビエル、滅多なことを言うなよ。資格もないのに巫女のふりをした者は死刑だ。そんなリスクを負う者が早々見つかるはずもない」

耳を疑うような単語が飛び出てきた。私はなんとか反応を堪える。

「キャプテンが甘い声で迫れば何でも言うこと聞くよーな女、いくらでも見つかると思うけど？」

ハビエルと呼ばれた青年は嫌な目つきで私を見た。十代後半の男の子なのに、かなり荒んだ目だ。ガリアストラとの関係を揶揄するみたいな眼差し。この子も私をストーカーまがいじゃないかと疑っているらしい。

周囲の人にこう思われるくらい、ガリアストラの周辺では女性が引き起こす騒動が多発していたのだろう。

疑われていることはこの際置いておいて、同情してしまった。

私はただの一回で、すっかり神経がすり減っているのに……

「何か証拠があるのか、ハビエル？ そうでなければ巫女様に対する侮辱だぞ。おまえ、先日の港でも船から降りなかっただろう？ あの時巫女様の部屋を監視していたはずだ。その時、何か証拠を掴んだのか」

「違うよアメツ。そうじゃないけど……でも！」

「おまえの監視をすり抜けてこの方が船に忍び込んだというのは、無理がありすぎるぞ」

「だけどツ……！」

「おれはおまえの能力を理解しているし、信頼しているからな」

「ッ、そうかよっ！」

アメツさんに褒められて、ハビエルくんは舌打ちしつつ頬を染めた。そして私が見ていたと気づくと、こちらを睨みつけてそっぽを向く。

アメツさんは改めて私に向き直った。

「巫女様、御前を騒がせてしまい大変申し訳ございません」

「僕は認めてねーからな！」

物腰丁寧なアメツさんと、ガンをつけてくるハビエルくん。

二人を先頭に、部屋に押し入ろうとしていた人々は水が引くように去っていった。

最後の一人が扉を閉めてくれてその場が密室に戻ると、かくんと膝が折れる。足に力が入らない。「……巫女のふりをしたら死刑って、何……!?!」

「事が露見すれば死刑になるのを承知の上で、俺のためにここまでしてくれろとはな。君を見直したよ。ただのストーカーじゃねえとな。きちんと港まで送り届けてやる。しかし、俺は本当に罪な男だぜ」

「死刑だなんて知らなかったんですけど!?! どうして説明してくれなかったんですか!」

「ハア？ 知らねえわけがねえだろ。常識だぜ」

ガリアストラは怪訝そうに眉を擡めた。

「ああ、なるほど。君は記憶を失っているって設定だもんな？ 恐び込んだわけでもねえ。気づいたらここにいた被害者で、俺に責められる謂われはないと言っていてえんだったな。だから巫女のふりをしてはならないという三歳の子どもでも知っている常識ですら、知らねえふりをする」

日本語圏でいつそんな常識が生まれたのだろうか？

ぞっとした。

自分が気づかぬうちに死刑に値する罪を犯していたことよりも……彼の唇の形が聞こえる日本語を発する時の形と、食い違っていることに――

「――まあ、君には助けられたんで、君のそのごっこ遊びに付き合ってやろう」

殺到していた船員を追い返せたガリアストラは上機嫌だった。私が知らないと言った口にした、この世界の常識について、笑顔で説明を始める。

「海の女神に認められた者は巫女を名乗る資格を得る。だが、その資格もねえのに巫女のふりをした者は、死刑。――世界中どこでも共通認識だと思っていたが、君はどここの国から来た設定なんだい？」

私の言葉を全く信じていない彼のその質問に、正直に答えることはそれほど抵抗がなかった。

「……異世界です」

「なるほど。異世界じゃあ知らねえよなあ」

彼はわざとらしく抑揚をつけて言う。一ミリも信じていないのが窺える口調だ。

「私がどこから来たかは、この際どうでもいいです。それより、あの、私、これからどうしたらいいんですか？ 無事に船から降りられるんですよね？」

「勿論、君は俺に協力してくれたんだからな。その礼を持たせて適当な港で降ろしてやる。巫女のふりをしてもらう以上、一度ダバダのセリシラ港で降りてもらおうことになるがな」

「ダバダ王国、つてざつき言っていましたよね。その国の港？」

「そうだが……芸が細かいな」

私が記憶喪失のふりをしていると思っっているあなたにとつてはそう見えるんでしょうね。

よほどそう口に出してやろうかと思っただけれど、皮肉を言っても仕方ない。

常識的に考えて、勝手に部屋に入る異性は記憶喪失者ではなくストーリーカード。万に一つの可能性で不幸な記憶喪失者でも、それと同時に異世界からの訪問者である可能性はほとんどない。

私はその億分の一の可能性の体現者だつてこの場で信じてもらうのは、どう考えても難しかった。「ダバダ王国の、セリシラ港で降りた後……私はどうすればいいんですか？」

「家までの路銀をやるよ。それでさよならだ。構わねえだろう？」

「……そうなりますよね」

別にガリアストラと一緒にいたいわけではないものの、その後の生活に不安を感じずにはいられない。元の世界に帰る方法なんて、全く思いつかないのだ。

そもそも、こちらへ来た理由がわからない。

ストーカーに追われて、あわや見つかる——そう思った瞬間に、この世界にいた。

「——そういえばこちらへ来る直前、女神様の像に祈ったかも……」

「今度は海の女神に見初められた巫女のふりをするのかい？」

ガリアストラは私の独り言を聞きとがめると、つまらなそうに打ち棄てた。

「君が巫女として女神に与えられた海の宝珠に願ったから、俺の部屋に運ばれてきちゃったと？次から次へと口から出任せか。神をも恐れねえとは、御見逸れしました。共犯者としては頼もしいね」

「私、そんなこと言っていないんですけど。海の宝珠って何ですか？」

「君の知らないふりに付き合うの、いい加減面倒くさくなってきたな」

「……海の宝珠について話を聞かせてください。今、海の宝珠に願うと言いましたよね？」

「ああ？ 女神に見初められた女は、海の宝珠を与えられ海神の巫女となる。海の宝珠には願いを叶える力がある——と説明してやりやあ満足なのか？」

「願いを叶える力？」

「まるで初耳といわんばかりだ。演技がうまいのは、俺にとっちゃ助かるよ。セリシラ港までの残る一ヶ月の旅路でも、その演技力を十分に発揮してくれると期待しているぜ」

「海の宝珠ってどうしたら手に入れますか？」

ガリアストラの言葉は半ば無視して、質問を続ける。

願いを叶える力を持つ宝珠だなんて本当にあるか眉唾ものだけけど、一番信じられないのが今こ

こにいる私の存在だ。どんな不思議なことが起きたっておかしくない。

女神像に祈ったらこちらへ来た、ような気がする。

助けてほしいと願ったから、叶えてもらったような気がする。

だからもう一度願ったら——今この時に心の中で願っても叶わないものの、適切な手段で願ったなら、元の世界に帰れるかもしれない。

彼は私の無視にむっと鼻の頭に皺を寄せつつ、それでも律儀に答えた。

「神話では、海の宝珠は女神の涙と言われている。それが正しいなら、泣いてもらえりや手に入るだろ。もつとも、現実的な話をすれば、女神に信仰を認められた女が巫女として認められる時、海の宝珠を証として賜る。流れ着いた宝珠を浜で拾ったっていうラッキーな話も聞かぬ。闇のマーケットに流れている海の宝珠は、大抵が偶然、海辺とかで拾われたものだ」

「売っているところがあるんですね」

「馬鹿高い値段でな。なんだよ君、海の宝珠が欲しいのか？ 俺を惚れさせられますようになんて願っても無駄だぜ？ 知つての通り、他者を不幸にする願いは叶わない」

もうガリアストラの言葉はほとんど無視した。

確かに私が悪い。彼の部屋に勝手に入り込んだのは事実だ。それが不可抗力によるものだとしても、事実は揺るがない。だから彼が怒るのは仕方ないこと。

でも、いつまでも謝り続けてはられないのだ。帰る方法を見つけなくてはならない。

彼にとつても、私は早急に消えたほうが嬉しいだろう。

「夢みたいなことを言っただけで、そろそろ部屋を出ていってくれ」

「ここを出て、どこへ行けばいいんですか？」

「巫女を名乗った君には、この部屋のちょうど真下にある一等客室を使う権利がある。巫女の荷物置いてあるから好きに使え。さあ、俺の部屋からとっと出ていってくれ」

彼の態度は、ストーカーと同じ空気を吸うのはもう勘弁だと言わんばかりだ。

気持ちが悪くなるだけに反論はできないものの、気分は最悪で、つい言葉が棘を含む。

「海神の巫女っていうののふりをしていること、バレたらあなたの国では死刑なんですよね？ おかげさまで私、すごく大変な状況なんですけど、バレないようにするためのアドバイスとかってないんですか？」

「記憶喪失のふりをやめること」

「だから、私は本当にわからないんですってば！」

私の抗議をガリアストラは黙殺した。

「巫女っぽいことをしなきゃならねえ時には、『海の女神の慈悲と恵みがあなたをお守りくださいますように』って唱えておけ。海の女神の慈悲と恵み、こころへんを状況に応じて使い分けろ」

「わあ、すごい実用的なアドバイスをありがとうございます。概要がさっぱりわからない」

「それと俺に対して敬語をやめろ。俺たちは義理とはいえ兄妹ってことになってるんだからな」

「……ガリアストラお兄ちゃん」

「やめてくれ、気分が悪い」

目眩を堪えるように目頭を押さえ、彼は首を横に振る。

「ガリアストラでいい。義妹の名はパウラ・ラストだ。ミズキ、君の実名は伏せておけよ」

彼が私の名乗った名前を覚えていた上に、口にしてみせたのは意外だった。

「——ふわあ……っ!?」

いつものように寝起きに伸びをしたら、ハンモックがひっくり返ってしまった。

「痛！ 腰打った……!!」

私はふるふる震えながら立ち上がり、昨日までのものと違う寝床を見やる。

低い天井に吊され、宙に浮かんで揺れるのは、どこから見てもハンモックだ。

横たわると身体がお尻から沈み込んで身動きがとれなくなり、寝相が悪いと編み目に絡まりそうになる。

今は波が静かだから御利益をあまり感じないとはいえ、海のただ中で嵐に遭った時には、ハンモックじゃないと寝るところの話じゃなくなるのだろう。

窓の外に見えるのは青い海と白い帆、空を区切るいくつもの縄に帆柱。

張り巡らされた縄の間を猿のように身軽に飛び回る船員たち——この船は、帆船だ。

「おはよう、異世界……なんてね」

潮の匂いのする薄暗い部屋、縄で壁にくくりつけられた埃を被った大荷物。ここはガリアストラの部屋じゃない。彼の部屋の下の階にある客室だ。

階の最奥にあつて一番広く、調度品はどこもなく女性らしさがあつた。壁際に積まれ、縛りつけられた大量の荷物の中には、女性用の服がたっぷり入っている。

見たところ女性の船員はいないみたいなのに、どうして女性のための物資があるのか不思議だつた。

ガリアストラの顔を思い浮かべると、恋人だの愛人だのという単語が浮かんだ。深くは考えまい。可愛い服というのは異世界でもそれほど変わらないようで、自分で選ぶのなら絶対に着ないデザインのものばかりある。

そのうちの一着、できるだけ地味なデザインの無地の白いワンピースに着替えた。季節は昼か秋か、この服装で快適に過ごせそうだ。

そして、着替え終えた頃、扉がノックされた。

「ガリアストラだ。起きているか？ 朝食を持ってきたぜ」

「ありがとうございます」

扉が開き、私はひよいと差し出されたプレートを受け取った。

パンにスープに、レモンがまるごと一個。

レモンがあることにほっとした。海の上では新鮮な果物が生命線だと歴史が証明している。

「新鮮なレモンがあるってことは、最近港に寄ったばかりなんですね」

「君もよく知ってるだろう？ ハビエルの故郷のクレン島で採れたレモンだ。いや、君が乗り込んだのはクレン島の次の島だつたか。いや違うか。異世界だつたか！」

ガリアストラは自らが口にした冗談に、腹を抱えて笑う。感じが悪いものの、頭のおかしいやつと思われるぐらいなら冗談だと思われたほうがましだ。私は開き直すことにした。

「信じてもらえなくてもいいですけど、そういうわけで元の世界に帰るために海の宝珠が欲しいですね。っていうか、あなたもここで食べるんですか？」

「俺の顔を見ながら食う飯はきつと美味いぜ？」

「むしろ味がわからなくなりそうですね。まあいいですが。何か用があるんでしょう？」

「軽く打ち合わせをしておこうと思つてな」

ガリアストラは肩を竦めてみせた。

あまり彼に興味があるそぶりをしたくない私は、すぐに目を逸らす。

ストーリーされることの気持ち悪さは知っている。だから彼が、私に強い嫌悪感を示すのは仕方がない。

それでも、その恐怖を味わったことがあるからこそ、ストーリーカーと間違われているのは嫌だつた。

「……料理、美味しいですね。……冷蔵庫もないだろうに」

ペースト状のスープは、見た目はともかく、ミンチ状の肉とトマトの味が絶妙だつた。

この船での明かりは、ランプやランタンだ。つまり、少なくとも船の中には電気がない。ということは、冷蔵庫も、ガスコンロもないはずなのに。

「うちの船の飯は美味いと評判なんだ。素材がいいし、コックの腕がいい」

「へえ、いいお嬢さんになれそうですね」

「コックはアメツだぜ」

「ゲホッゴホッ」

家庭的な男性を想像していたら急にアメツさんの凶悪な顔を想起させられ、咽せる。

「アメツは君に会いたがつているが、接触を重ねると君が身代わりだと露見する可能性が高まる。会いたくなくちゃ、できるだけ部屋から出ないようにしろよ」

「できるだけ？ 出ても構わない、つてことですか？」

「ずっと部屋にいたら息が詰まるだろ？ まあ、強制はしねえよ。出歩くのは、すすめねえがな」
ガリアストラは微笑みを浮かべていて、一見穏やかに話している。でも、瞳の奥にある感情は、冷えていた。私を信じている、というわけじゃない。

彼が私を強く束縛しないのは、最悪私はどうなってもいいと考えているからだと思う。

「じゃあ、できるだけ部屋にいますようにします」

「そうか。それがいいだろうな」

ガリアストラはもう一度微笑むと私の頭にポンと手を置いた。……私は思い切りのけぞる。

「なんで逃げるんだい？」

「どうして不思議そうな顔をしてるんですか？ 勝手に触らないでください！」

「君にやる気を出してほしいから特別にサービスしてやったんだぜ？」

「ストーリーカーだと思ってる相手にそういう接触するの、やめたほうがいいですよ……!? 勘違いをエスカレートさせて暴走させること間違いないですからね!?」

実体験だ。本当にやめたほうがいい。

私がストーリーカーされることになったきつかけの行為は、ごく一般的な親切の範囲内ではなかった。それに比べると、頭ポンなんて完全にアウトすぎる。

「だが、俺は頑張つてくれる君に何か報いたんだがな。そうだ！ 正体が露見せずにダバダ王国のセリシラ港まで辿り着けたら、君のために一晩空けてやる。そうしよう！」

「一晩空ける？ どういう意味？ ——そういう意味!?」

いかかわしい提案をされたと気づくのに、数瞬を要した。その後、ぎよつとする。

「たくさん思い出を作ろうな、ミズキ」

ガリアストラはアルカイックスマイルを浮かべている。

男の中には、ひと欠片も好意を抱いていない女性を相手にできる人種がいるらしい。
けれど女は、好きでもない相手とは、たとえ美形でも無理、なタイプが多いんじゃないかな!?
特に私とガリアストラの間にあるような、とんでもない誤解が残っている場合には。

「絶対にいりません！ そして本気で気をつけて!? 勘違いする女が悪いと言っても、限度つても
のがありますからね！」

「敬語はやめると言っただろう？ 俺と君の仲だしよ」

義理の兄妹のふりをしているだけの仲だ。妙な言い方をしないでほしい。

「昨日は驚いて、君に心ない言葉をかけてしまった気がするが、悪かったな」

「な、何ですか、いきなり……」

「君が驚かせるから悪いんだぜ？ こうして見てみると、ミズキ、君は結構可愛いんだな」
ガリアストラが鋭い目尻を緩ませ、魅力的にはにかんでみせる。絶大な威力を持つその表情を前に、私は無表情であるよう努力した。

彼が本心から私の容姿を褒めているだなんて勘違いはしない。
……多分、ガリアストラはストーカーの恋心をコントロールしようとしているのだ。

どうあがいても逃げ場のない船の上で、なぜか彼の義理の妹のふりをするようになった。そんな私が逆上しないように、宥めるために、彼は嫌悪感を隠すことにしたんだろう。

そう思うと彼の態度を気味悪がるのも違う気がして、私は力なく溜め息を零す。

「それじゃ今日一日、頑張ろうな。ミズキ」

これから毎朝、そのきらきらしい顔面で応援してくれるのかな……

お互いのために早めにお引き取り願おうと、私は朝食をかきこんだ。

できるだけ部屋にいるようにすると、ガリアストラに宣言してから一週間。

部屋の設備的に、完全に引きこもるのは無理だった。今日も普通に外出のために部屋の扉を開ける。すると、そこにはアメツさんが仁王立ちしていた。

「……失礼しました」

「お待ちください、巫女様」

外からドアノブを掴まれ、半開きのまま扉がびくとも動かなくなる。

「ごめんなさい、今から二度寝の予定ができたので、ごめんなさい。お引き取りください」

「巫女様、やはりおれが先走ったばかりに、ご不快にさせていただきましたね。誠に申し訳ございません」

「いえ、私に謝られても」

謝るならガリアストラに謝ってあげてほしい。

アメツさんは、いもしない義妹さんに会わせろって大騒ぎした軍団のトップだ。

未だにどうしてそんな誤解が生まれたのかわからない。

わかるのは、海神の巫女という存在がこの世界の人にとって特別なだろうということくらいだ。

「手短かに用件をお伝えいたします」

そう言ってアメツさんは、扉の隙間に足をねじ込んだ。そのまま、その場に膝をつく。

「このたびは、ご迷惑をおかけしてしまい誠に申し訳ございません。お詫びに、こちらをお持ちしたのです。どうかお受け取りください」

「あの、立ってください」

止めても跪くのをやめない彼が差し出したのは、ハンドボール大の薄汚い布の塊だ。

とりあえずそれを受け取れば帰ってくれそうなので、手にしたものの、若干臭い。

これがお詫びの品ってどういうこと？

「襪に包んでのお渡しで申し訳ございません。ですが、余人に露見してはならぬと思い、そのような形で保存しておりました」

「何が入っているんですか？」

「開けてください」

言われるがまま包みを開くと、更に野球の球大の包みがあった。それを開くと、ゴルフボール大になる。汚い布のマトリョーシカかな。

「えっと、これは……」

「後もう一枚、開けてください。本来巫女様にお返しすべきものですので、こちらをお詫びとするのは恐縮ではあるのですが、おれはこれ以外に価値のあるものを所持していません」

最後のひと包みを開きコロリと出てきたものを見て、私は海だもんねと思った。

それは大粒の真珠らしい。

これなら確かに、お詫びの品になり得るだろう。

「本来巫女様がお持ちになるべきもの、女神の涙、願いの叶う神器——海の宝珠です、巫女様」

「えっ、海の宝珠!？」

「——ご覧になればおわかりいただけますが。まさか、見たことがないわけもありませんし」

アメツさんが疑いの目つきを向けてくる。

確かガリアストラが、海の女神によって巫女に選ばれると、この宝珠をもらえると聞いていた。本物の巫女なら宝珠の見た目を知らないはずがないのだ。

「いや、これ自体は見たことあるんですよ、普通に。でも、これは……」

見たことがある、というのは本当だ。私の目には真珠にしか見えないから。

貝が自分の中に入ってきた異物をコーティングしてできる美しい玉。流れる乳に虹がかかったような美しい色彩に、心惹かれたいと言わない。

けれど、欲しければ安月給のOLでも買える程度の宝石のはずだ。

それがこの世界では海の宝珠と呼ばれているとは……

そして、どんな願いでも叶えてくれる海の女神の宝だなんてことある？

「巫女様、何か気になることがおありですか？」

「その……いや、つまりですね！」

心臓がバクバク音を立てていた。

うまく言わないと、巫女じゃないってバレてしまう。そうしたらきつと大変なことになる。落ち着かないといけない。でも、落ち着けない。

だからその理由を、普通に言えたいんだと気づいた。

「こんな品を渡されるとは想像もしてなくて……誰でも欲しがるとは、まさか、本物だとは思えない」

「偽物の宝珠など、存在するのですか？ この輝きを作り出すのは、非常に難しいと思います」

この世界には真珠が存在しないのか、あるいは真珠全てが海の宝珠と呼ばれるのかもしれない。案外これまただの真珠で、海の宝珠と呼ばれているだけで願いを叶える力なんてないのかも。

そう考えると落ち着いてきたものの、がっかりもした。

私が元の世界に帰るための唯一の手がかりだと思っただけ。

海の宝珠は存在していてもraithたいし、願いを叶えてくれる神器であってほしいけど。

「無償で譲渡されるだなんて信じられません。アメツさんにはこれを使って叶えたい願いはないんですか？」

「おれも欲深い人間ですので、限りなく願いはあります。ですが俗な願望を満たすよりも、海の女神に寵愛された巫女様にお返しするのが筋というもの」

アメツさんは少し口元を緩めた。その顔はどうしても恐い。

でもそれは生まれながらの容貌であって、彼の申し出は聖人のように無欲なものだった。

「他の者に見られぬように早くしまってください。おれはこれを所持していることをガリアストラにも伝えませんでした。それほど細心の注意を払い所持するべきものです。おわかりでしょうか」

真剣に、警戒に満ちた顔つきで促され、ポケットにしまい込んだ。

「……どこぞで巫女様にお会いできたなら渡そうと、ずっと思っておりまして。ですので、巫女様がこの船に乗船されると聞いた時にはやっと時が来たのだと。それなのにお会いできずに時が流れ、おれは我を失ってしまったのです。先日はお騒がせいたしましたして誠に申し訳ございません」

「私が乗船するって誰に聞いたんですか？」

誰かがアメツさんにそんな嘘を吹き込んだらしい。そのせいで、乗ってもいないガリアストラの義妹さんを血眼になって探していたというわけか。

「勿論、ガリアストラにです」

「え？ ……ガリアストラに？」

「はい」

「えっ、と。ガリアストラは、アメツさんたちに私は船に乗っていないと言っていたはずですよね？」

「は？ ——巫女様がおれたちのような粗暴な輩に会わずに済むよう、そう言えとガリアストラに命じておられたのですか？ ですが、乗船時にあれだけ大荷物を船に運ばれていましたし、乗船される時もあなたはコートを頭から被ってはいらしたが、流石にあれで隠れていたというのは無理があるかと思えます。これが、秋の信託によって巫女となられたあなた様に最後の自由を満喫していただくための旅だとは、聞き及んでおります。今後は邪魔だてなどいたしませんので、ご容赦ください」

あれ？ ガリアストラとアメツさんの話が噛み合わない。

これ以上話すのは何だかまずい気がして、私は言葉を呑み込んだ。

アメツさんは立ち上がって身を引くと、折り目正しく頭を下げる。

「改めて巫女就任、おめでとうございます。その海の宝珠は巫女様に捧げます。どうか巫女様の正義のためにお使いください。女神の信徒として巫女様のご裁可に従います」

アメツさん、顔で誤解されるタイプなだけで、すごくいい人なのでは？

部屋を強襲したのだから、ガリアストラが言っていたほど単純な理由ではない可能性が出てきた。「ガリアストラをあまり信用してはいけませんよ、巫女様。なぜあれほど頑なにあなたを隠そうと

していたのか、おれにはわかりません。勿論、粗野な海の男たちに会わせたくないという気持ちはわかりますが……どうもあなたは何かにつっかかっただけで……だつたら、ご褒美が……」

今まさにガリアストラに嘘をつかれていたかもしれないことに気づいた私は、自然と首肯していた。

アメツさんも私に頷き返すと、宣言していた通りすぐに去っていく。
ひとまず、少し明るいニュースもある。

「この海の宝珠を使えば、私はいつでも元の世界に帰れるかもしれないってこと？」

願えば、叶えられる魔法の玉。もしそれが本当なら、今すぐにでも帰ろうと思えば帰れる。

懸念があるとすれば、元の世界の場所も時間も寸分違わぬ状況のまま戻されたら困るってことくらいだ。そうなるとストーカーに追われている状態に戻ってしまう。

「でもこれ、私にとってより、ガリアストラの義妹さんに対しての贈り物だし、勝手に使っちゃいけないよね」

ただ、願いを叶える宝珠を使う以外に元の世界に帰る方法なんて思いつかない。

「私、命がけでガリアストラの義妹さんのふりをしてるわけで……だつたら、ご褒美があつてもいいんじゃないかな。ボーナスの内容については交渉すれば……よしっ」

少し大きめの真珠にしか見えない神器を握りしめて、決意した。

勝手に使ったりするつもりはない。ちゃんとガリアストラに説明しよう。

アメツさんからもらったものだ。義妹さん名義で受け取ったものだ。だけど、これが欲しい

のだと。ちゃんと説明して、お願いして、譲ってもらおう。

きつと誠心誠意話せばわかつてもらえる。

異邦人である私にとって、元いた場所に帰るための、唯一の蜘蛛の糸なのだ。

でも、何もかも正直に説明する前に確認したいことができた。

「アメツさんはガリアストラの義妹さんが帆船に乗ったのを見たって言うてる。でもガリアストラはそもそも乗せてないって……どちらが本当のことを言うてるの？」

私は海の宝珠を握りしめたまま部屋を出た。

「——すみませーん！ 皆さん！ ちょっといいですか！」

甲板で仕事をしている船員たちに呼びかける。

「私がこの船に乗ったところ、見ていた人はいますか？」

後部から上甲板で働く人たちを見下ろし大声で訊ねると、彼らは一斉に顔を上げて言った。

「ゴルド島のことなら、みんな見ていたと思いますぜ、巫女様！」

「フード付きのコートを目深に被っただけだから、お顔は拝見していませんけど！」

「コート越しの体つきを見た限り、もつと凹凸があると思っただけがなあ」

「おい、巫女様に無礼な口を利くな」

「げえっ、よりによってアメツさんに聞かれるとか、ついてねえ！」

笑いに包まれる甲板で、私だけは愛想笑いもできない。

船長室を仰ぐと、ガリアストラが手すりにもたれて私を見下ろしている。彼は、寸毫の動揺も見

せずに楽しげに微笑み私に手を振ってみせた。

その余裕はどこからくるのか。

睨みつけても、彼の笑顔は揺るがない。

——この船には彼の義理の妹が隠されている。

それを私が見つかったことなんて、彼にとっては些末事らしかった。

しばらくして、ガリアストラが船長室へ引つ込んだ。

私はいつでも使えるように海の宝珠を握り後を追う。文字通り、海の宝珠が私の命を救う生命線になりかねない。

というか、宝珠って願えばすぐに叶えてくれるものなのかな？

女神を呼び出す呪文を要求されたらどうしよう。

冷や汗を流しつつ部屋に入る私とは違い、中にいたガリアストラは落ち着いていた。

「緊張する必要はねえよ、ミスキ。俺は君に危害を加えるつもりはねえからな」

「……そう言うってことは、やっぱり私に何か隠していたんだね、あなたは」

「まあな。だが君は俺と一蓮托生の身の上だから、秘密を話しても構わないと思っっているぜ。この一週間見たところ、君はそこまで馬鹿ではないようだし」

ガリアストラは目を細めて艶やかな笑みを浮かべた。

「君は優しい女だから、俺の嘘をきつと許してくれる。だろう？」

甘いマスクで微笑んでみせる。

私が彼に恋する女性であれば、即行で許しただろう。何を許すかもわからないまま。

でも、許すも何も、私はまだ何もわかっていないし、怒ってもいない。

「何を隠していたのか知らないし、隠している内容がわかるまでは、許すことなんてできないよ」
ガリアストラは机に放られていた黒い革手袋をはめながら目を丸くした。

「意外な反応だ」

「あなたに惚れている女の反応ができなくてごめんね」

「そうだな。君はまさか、本当に俺に惚れてねえのかよ？ 俺に惚れてくれているからこそ、どんな状況だろうと俺を許してくれるだろうと安心していったんだが。困ったな」

全然困っているように見えない顔でまた微笑む。私がガリアストラへの恋心を抑え込んで、やせ我慢していると思っついそう余裕ぶりだ。

睨みつけると、彼は更に笑みを深めて私の横を通り過ぎ、部屋の鍵を閉めた。

今この瞬間でさえ、ガリアストラは私を自分に恋するストーカーだと信じているらしい。

「それじゃ、君をこのビビアーナ号の船長である俺しか知らねえ隠し部屋へご案内しよう」

アメツさんは、船に乗ったはずなのに姿の見えない巫女を探していた。

巫女の姿を求めて船長室を急襲したのだ。それまでに、それ以外の場所は全部調べたに違いない。それでも見つからなかったのは、見つからない場所に隠されていたせいだ。

「あなたの義妹さん……乗っていたんですね。乗せたと誤解されたなんて嘘はすぐにバレるのに、

どうしてそんな嘘をついたんですか？」

「君が巫女のふりをした者の末路に怯えて部屋に閉じこもってれば、バレやしないはずだったさ」

「ずっと部屋にいるなんて無理だと思えますけど」

「まあ、だから——余計なふるまいをしたら、君を殺すつもりだった」

「なっ」

ガリアストラは部屋の奥、薄紫の紗の裏のハンモックの横にある、戸棚に触れて何かを操作した。すると、カコンと音を立てて戸棚の底板が下に落ち、蝶番でふら下がる。

「……そこが、隠し部屋の入り口」

「ああ。見つかったらまずい禁制品なんかを運ぶ必要があったら使おうと思って作らせた。この部屋があるのを知るの他に、陸にいる設計士と大工が数人くらいだな」

急な階段が螺旋を描きながら下に向かっていているらしいが、真つ暗闇で、明かりはない。

口の中が渴いて、視界がすぼまっっていく。

何も言わないほうがいいのは本能的にわかっていた。でも、聞かすにはいられない。

「下の部屋で私を殺すつもりですか？」

「まさか。君にはセリシラ港に着くまでいてもらわねえと困る。君の姿が見えなくなれば、今度こそアメツが俺の部屋で暴れまくって、きつとこの部屋を見つけちゃう」

「でも、さつき殺すつもりだったって——」

「アメツや船員たちの前で、あいづらが納得できる形で、だ。そうでなきゃ意味がねえ」

てつきり言い訳とか、弁解するかと思ったのに違った。

「海の上じゃ女神に寵愛された巫女は病気になるねえ……そんな俗信を利用して、君の病気をでっちあげ偽巫女であると公表する。俺は義妹が偽巫女だったと初めて知って悲しむ義兄を演じよう。

君が何を言おうと、偽巫女の虚言であると仲間たちに納得させる自信が俺にはある。そうして騙された悲しみと怒りに駆られみんなで君を処刑し、あいづらはようやく納得してくれる」

ガリアストラは当人を目の前にして、平然と私の死を予言してのけた。

「巫女はもうこの船に乗ってねえってな」

ただ、義妹の不在を証明するためだけに——

「どうかしてる！ 関係ない私を巻き込んでまで、どうして義妹さんを隠すの!?!」

「見りゃあわかる。ついて来い。もう一度言うが、君を殺すつもりは今はない」

「まるで、人を殺したことがあるみたいない方」

「あはは！ 殺したことがねえように見えるのか？ 俺の美貌は無垢さまで演出してくれるっのかよ。知らなかったぜ。これは大いなる発見だな」

「おかしいよ、こんなの……」

ガリアストラは笑いながら階段を下りていく。階下から聞こえる笑い声の反響にぞっとした。

この世界の文明や人々の考えはおそらく中世ぐらい。人が人を殺すのに理由などいらぬ時代なのだ。

人殺しだと認めたガリアストラについていくのは怖い。

けれど、今の私には海の宝珠がある。その気になれば、いつでも逃げ出せるはずだ……多分。これが本物の神器で、願いを叶えるために特別な手順が必要でないのなら。

「おっ、ついてきてくれたか。足元が暗くて歩きづらいだらう。手を貸そうか？」

「いりません。自分で歩けま——うわっ!？」

「つと、苔があつて滑るから気をつけるんだな」

階段から滑り落ちかけた私は、ガリアストラの腕に支えられた。

慌てて離れたものの、彼が笑っている気配は暗闇でも感じられる。それが悔しくて歯がみしてしまつた。

「さっさと行きますよ。先に階段を下りて！」

「可愛い姫君の仰せのままに」

ガリアストラの軽薄な冗談を無視して、階段を慎重に一段ずつ踏みしめて下りていく。

ふいに、異臭がした。

吐き気を催す臭いが、階段の途中から漂い始めている。発生源は明らかに下の部屋だ。

「どうしてこんなところに義妹を置いておけるのか……！ 何を笑っているわけ!？」

「君がなぜそんなに顔を真っ赤にして怒っているのかと思うとおかしくてな。まさか俺の義妹のために怒ってくれているのかい？ 知りもしねえ相手だらうに。パウラが巫女だからか？ 平然とした顔で巫女のふりができる君は、信心深い信者ってわけじゃねえだらう」

おそらく彼の義妹は暗くて狭い、悪臭の漂う船室に閉じ込められている。

そんなことをしてなお薄笑いを浮かべている彼を見てると、目の前が怒りで真っ赤になった。

「私が怒っている理由もわからないなんて……！ 女の子がこんな場所に閉じ込められているんだもの、怒る理由には十分でしょ!? 特別な関係じゃなくなつて! あなたにとっては違うの? 見知らぬ人間だったら、酷い目に遭つていても何も感じない? あなたの神経ってどうなっているわけ!？」

「生まれる時に母親の腹の中に大事なものを置いてきちまつたに違いねえだらうなあ」

ガリアストラはのんびりと答える。まるで、言われ慣れているみたいだ。

私は、暗闇の中に浮かぶ彼の輪郭を探してその表情を窺おうとするのをやめた。

どんな表情をしているかなんて決まっている。いつも通り軽薄な笑みを浮かべているに違いない。

「あなたのことなんて、どうでもいい。義妹さんをここから連れ出せれば、それでいいんだから」

「それは許さねえ」

「アメツさんたちに助けを求めますよ!」

「そうしたら君が偽巫女だつてバシレて殺されるな」

「だからって、こんな酷い臭いのする暗くしてじめじめした場所に、女の子を置いていけるわけない!」

「……君は、あくまでパウラのために思い、そう言ってくれているんだよな」

「当然でしょう」

「なら、きっとわかつてくれると信じているぜ」
「何を——」

「どうして俺の義妹が外に出ることが叶わないのか。その理由を知ってなお、君の優しさが損なわれねえと信じるしかねえからな、こうなった以上は」

背中をトンと押されて肝が冷えたものの、気づくと階段の一番下まで来ていた。私は底まで辿り着いていて、ふらつくだけで済む。

窮屈な廊下はガリアストラが手にしたランタンの明かりだけで十分に照らし出される。彼すぐ近くに扉があった。

「ミズキ、この扉を開けて奥に隠された真実を見ろといい」

言われなくとも、彼の義妹を助けるためには中に入らないと仕方ない。

私は扉のノブを回して引いた——その瞬間、刺激臭が鼻をつく。吐き気に襲われて、無意識に立ち止まってしまった。そんな私を押しつけて、ガリアストラが中に入る。

私たちの立てた物音に、中の住人もすぐに気づいた。

「——イリス、そこにいるの？」

「忘れちゃったのかい、パウラ？ 君の侍女は君を置いて逃げちゃまったんだ。もういない」

「ああ、そうだったわ……そうね、あたし、見捨てられたんだったわね」
掠れた弱々しい不協和音が微かに闇の中に響く。

今にも途切れそうなその声からでも、ガリアストラには声の主の感情の機微がわかるようだ。彼

は憐憫の感情を滲ませて、その人物に優しく寄り添った。

「可哀想に。裏切り者のことなんて忘れちまえ。君は必ず俺が守ってやるからな」

「うん……ありがとう、お兄様」

そして、黒い革手袋をした手で、ハンモックの上に収まった朽ち木の塊みたいなものを撫でる。それがガリアストラの義妹だった。

「ガリ、アストラ？ 義妹さん、どうして」

問いは、まともな言葉にならない。

悪臭のせいで呼吸が満足にできなかつたせいであり、現実を受け止めきれないためでもある。

「……お兄様、誰かいるの？」

「アメツたちが煩くなってるって話はしただろう？ 巫女である君がこんな状態だと知られたらまずい。だから君のために、君の身代わりをしてくれる女を連れてきたんだ」

「あたしの、身代わり？」

「そうだ。君のために命をかけて巫女のふりをしてくれる女で、ミズキという」

ガリアストラが微笑みを湛えた顔で私を見て、顎をしゃくった。

近くに來いという意味だ。けれど、臭いの大元は明らかに彼女だったので、思わず怯む。

「どうしたんだい？ ミズキ」

ガリアストラは顔色一つ変えていない。息も止めず、呼吸も普通にしているように見える。

私はそれを見習いたかった。

普段通り呼吸をしようとし、喉に刺激臭が絡んで咳き込んでしまう。

「ゲホッ、ゴホッ、うえっ」

「——風邪気味のところ連れてきて悪かったな、ミズキ。君はもう上に戻るかい？」
義妹さんが、自分の身に纏う臭いに決して気づかないように、ガリアストラは慎重にふるまっている。

咳き込む私をフォロ―する彼の言葉に涙が出た。

咳のせいじゃない。自分はなんて馬鹿だったのだろうと思っただから。

「大丈夫、です。——義妹さんに唾を吐きかけたりしませんよ」

ガリアストラは肩を竦めると、手袋をはめた手で壁に縛りつけられた藤のストールを示した。
私は促されるままそこに座る。すると、少女の姿がよく見えた。

「巫女のふりをするなんて、命知らず」

「そうかな」

「お兄様が好きなのね、そこまでするなんて」

ガリアストラが好きだからこうしているわけじゃない——そう答えるのは、きっと彼女の不安を煽る。どうして助けてくれるかわからないなんて、きっと怖いに違いない。

だから彼女の勘違いに乗っかることにした。

「うん……あなたのお兄さんのことが好きだから、私は命をかけてあなたを守るね」
すると、彼女が傷だらけの手を、力を振り絞るようにして動かした。

その手を握る。痛まないようにそっと——腐った落ち葉に触れるみたいな不気味な柔らかさを持つ手の感触に、声を殺して泣いた。

「おい、ミズキ——」

ガリアストラが息を呑んで何かを言いさして、やめた。

触るなっただけのことかもしれない。私がパウラちゃんに危害を加えると思ったのかもしれない。私が嘘をついたから、義妹に触れさせたくなかったのかもしれない。

けれど、彼はその先を紡がなかった。触れてはいけないわけじゃないのだろう。

私は彼女の手を握り続ける。

事の発端はただの成り行きだった。成り行きで、巫女のふりをする事になっただけだ。それがこの子を助けることに繋がるのなら、巫女のふりをしてよかったと思う。

「ミ、ズキ……あの、ね」

彼女——パウラちゃんが喘ぐように必死に言葉を紡ごうとした。私はその口元に耳を寄せる。
彼女は私にしか聞こえないほど小さな声で、けれど確かな口調で言った。

「お兄様に近づかないで。あんたなんか死んじゃえ」

「え——？」

「きゃあ！ 酷いわ！」

そして突然、掠れた声で叫び、どこから振り絞ったのかわからないくらい強い力で私を突き飛ばす。

「お兄様、今この女、あたしに死ねって言ったわ！」
そう言ったのはパウラちゃんのほうだ。

けれど、何が起こったのかわからなくて言葉が出てこない。

パウラちゃんは泣き叫ぶ。彼女の全身を蝕む恐ろしい病と相まって、その姿はあまりに悲痛だ。

「あたしの手を、握っておいてっ。お兄様に、心優しい女のふりを見せておいて、酷いわ！」

「パウラちゃん？ あの、私は何も言っつてな——」

「あたしには惨い言葉を……！ お兄様が好きだからって、酷い、酷い……っ！」

泣き叫ぶパウラちゃんに言葉を返すと興奮させてしまう。そう思っつて口を噤んだ。

けれど、それが誤解を助長する。

「君を信用したのは間違いだったのか？ ミズキ」

暗闇で静かに佇んでいたガリアストラが、底冷えのする声で言った。私は慌てて弁解する。

「違う、あの、本当に私はそんなことは言っつていなくて、むしろ——」

死ねという言葉を口にしたのはパウラちゃんのほう。

けれど、それを病床の彼女の前で詳らかにするのは、どう考えても身体によくなさそうだ。

「……悪いが先に上に戻れ、ミズキ」

「うん、わかった」

動揺して泣き噎ぶパウラちゃんの前で、これ以上の問答を続けるのは絶対によくはない。

私はガリアストラの部屋——船長室に戻る。空気が美味しくて何度も深呼吸した。

「……混乱、していたのかな？ パウラちゃんは神経が参っつてる？ 幻聴が聞こえる病気とか——」

中世じみた文明の世界で、船の上でかかる病気。

一つ思い浮かぶ病名がある。あまり詳しいわけじゃないけれど、世界史を嚙ると聞く病だ。

皮膚の異常や幻聴、幻覚などの症状を引き起こす、と本で読んだことがある。

「まさか、壊血病？」

新鮮な野菜や果物に含まれるビタミンCの欠乏が引き起こす病。かつて治療法がわからないため

に、多くの船乗りを死に至らしめた恐ろしいものだ。

パウラちゃんがかかっているのは、そういう病気なんじゃないだろうか。

その時、階段を軋ませる足音が近づいてきた。ガリアストラが戻つてきたのだ。

「ガリアストラ！ パウラちゃんは大丈夫？」

部屋に入った彼に訊ねると、彼は苦笑する。

「俺の前ではパウラを心配してみせてくれるのかい、ミズキ」

「本当に何も言っつていないの。それより、海の上で巫女は病気にならないって俗信があるから、パ

ウラちゃんは隠されているんだよね？ その病気の名前って——」

壊血病というものじゃないか。

もしかして、この世界ではまだ治療法が確立されていないんじゃない？

私の世界でも柑橘類に含まれるビタミンCがその治療に効果的だと発見されたのは、かなり時代

が下つてからだ。だから私は、ガリアストラとパウラちゃんの役に立てるかもしれない。

そう伝えようとしたけれど、ガリアストラは煩そうに私の言葉を遮った。

「また知らねえふりはやめてくれ。あれが海の女神の呪い以外の何に見えるっていうんだ？ さっさと海水で手を洗え。くだらねえ演技はいい。君まで呪われたら、この旅路は悲惨なものになる」

「呪い？ え？ 何？」

「もういい。手を貸せ！」

ガリアストラは乱暴に私の腕を掴んだ。痛みで声をあげそうになるのを堪える。

私が義妹のパウラちゃんに暴言を吐いたと思つて、彼が憤っているのはわかっていた。

「身体が弱り、過去の傷口が開いて腐っていく。誰でも知っている、海の女神の呪いそのものだ。

あれを見りゃあ、誰でもパウラが呪いにかかっているとわかるだろうが、なあ!？」

ガリアストラは怒りも露わに説明しつつ、私の手を桶の水で乱暴に洗う。

「巫女なら海の女神の呪いにはかからねえ。かからねえはずのものにかかり症状が進行したパウラは、あの場所から出られねえんだ。だから君に巫女のふりをしてもらう。だが、君が巫女ではないと露見した瞬には見捨てる。全ての罪を君に着せ、船員たちの同情を集めて殺す！ わかつたら死ぬ気で巫女のふりをしろ！」

ガリアストラに蔑むように見下ろされて、私は誤解を解こうと紡ぎかけた言葉を呑み込む。

聞きたいことはたくさんあったものの、それも口にしなかった。

何を言つても、今の彼には伝わらないし、響かない。

海水で手を洗わせられているのは、呪いが伝染るものだと考えられていて、それを防ぐために効

果的だと信じられているからだ。

宗教的おまじないなのか、あるいは水——海水？ で洗浄できるウイルスだと経験的に知られているのか。迷信の可能性が高いと思う。

壊血病にも、土の匂いを嗅ぐと治るなんていう迷信があった。

「俺のことが好きだから命をかけてパウラを守ってくれるっていう言葉に嘘はねえんだよな？」

赤くなるほど乱暴に洗った私の手を解放しつつ、彼は心底私を見下したように言う。

「……パウラちゃんを安心させるためにああ言っただけで、本当にあなたが好きなわけじゃない！でも、ちゃんと巫女のふりはする。パウラちゃんを家に送り届けるために！」

私はストーリーカーじゃない。パウラちゃんに死ねだなんて言っていない。

ガリアストラは何も信じていない目をして、薄く笑った。

「ああ、頼むぜ？」

私の言葉は伝わらない。悲しいけれど、その非は間違ひなく私にあった。

「着替えて帰れ。存外臭いが移っているからな」

私はこちらに背を向けている彼に謝罪する。

「……ごめんなさい、ガリアストラ」

「何を謝っているんだい？ ミズキ。謝られる覚えがありすぎて、よくわからねえんだが」

「私、何も知らないのに、あなたに酷いことを言った」

船に乗っているはずのパウラちゃんを隠そうとしたガリアストラを怪しみ敵視して、悪いことを

しているに違いないと決めつけた。

あまつさえパウラちゃんを連れ出そうとさえ考えたのだ。それがパウラちゃんのためになると思ったから。

「——さっさと着替えろ。香水をつけて行けよ」

ガリアストラは私の謝罪に答えなかった。

彼の中の私は、自分の部屋に忍び込んできたストーカーで、言いがかりをつけた上、病気の義妹を傷つける、本当に最悪な人間だ。

「報酬を半分、前払いしてやろうか？ ミズキ」

「何？ 家までの交通費のこと？」

一ヶ月かけてダバダ王国のセリシラ港という場所に行き、私は下船させられる。そこから家までの交通費をもらえるという話だった。

「今夜俺の時間をやろう、ミズキ。そうすりゃ君も病床のパウラを更にどん底に突き落とそうって気にならなくなるんじゃないか？パウラを無事に送り届けられりゃあ、港でもう半金を支払う」

彼は、私のガリアストラへの好意が暴走してパウラちゃんを傷つけたのだと思っっているらしい。

だから私の中にあるだろう彼への恋心を、自分の身体でコントロールしようとしているのだ。

着替えながら血の気が引く。

「そんなもの、いらぬ！」

「それが欲しくてこの船に入り込んだんだろう。君が俺を好きでいてくれてる、その気持ちは痛

いほど伝わっているってことを、俺も態度で示してやりたいんだよ、ミズキ」

ガリアストラは私がパウラちゃんを二度と傷つけないように、私を懐柔しようとしていた。パウラちゃんのために、義理とはいえ兄として。

その心根自体は尊敬できる。すごいと思う。

でもその内容は、一切受けつけられない。

「いらぬ、本当にいらぬから！」

ガリアストラは壁に張りつく私を見てきよんとした顔をした。意外だと言わんばかりだ。様々な誤解を受けるのは仕方がない。もうそれは諦めるけれど、許容できないこともある。

「目的地はここから一ヶ月くらいの場所にある、セリシラ港だったよね？そこで降りしてもらって、お別れって話でよかったよね？」

壁伝いにじりじりと下がり、私は逃げ道を探す。彼は必要以上に追っては来なかった。

当然だ。彼は別に私のことが好きじゃない。私が彼を好きなんだと思っただけだ。

その事実になぜか、心の奥のどこかが痛む。

嫌だ——痛みの理由は知りたくない。

「その日までちゃんとやるから！私に構わないで！」

「ミズキ！」

ガリアストラの声が追ってきたけれど、無視して部屋を飛び出す。

いくつも酷い誤解を受けているとはいえ、今回の誤解は極めつきで最悪だ。